虫明焼

その歴史と魅力

虫明焼とは

虫明焼とは、瀬戸内市邑久町虫明でつくられる焼物をいい、岡山県の郷土伝統的工芸品に指定されています。

はっきりとした起源は明らかではありませんが、江戸時代に築かれた岡山藩の筆頭家老伊木家の「御用窯」であったといわれています。虫明の窯では、主に日常に必要とされる道具がつくられていたようです。そして、京焼の流れを汲む茶陶が虫明焼の特徴のひとつとして知られるきっかけをつくったのが、伊木家14代当主伊木忠澄（三猿斎）です。

三猿斎は茶人として知られ、幕末から明治時代にかけて京都の陶工、初代清風与平や眞葛香山を招き、自分好みの茶道具をつくらせました。その後、虫明焼は「日本一清楚」と評される焼物として知られるようになりました。釉薬や陶土など、虫明焼ならではの素材と技法を活かし、伝統に新しい造形や感覚を取り入れた作品づくりが現代まで続いています。

【虫明とは】

虫明は瀬戸内市邑久町の瀬戸内海に面する地域で、現在は牡蠣の養殖が盛んなことで知られています。古代・中世には風待ち、潮待ちの港として栄えていました。

また、平安時代から数多くの和歌に詠まれてきた風光明媚な地域でもあります。最もよく知られているのは、平忠盛の「虫明の瀬戸の曙見る折ぞ都のことも忘られにけり」という『玉葉和歌集』に収められた歌です。平安時代の歌人、藤原定家や、鎌倉時代の後鳥羽上皇など多くの歌人も虫明の歌を残しています。

【虫明と伊木家】

伊木家は、三万石を知行していた岡山藩の筆頭家老です。寛永９（1632）年、因州鳥取を治めていた池田光政（1609-82）が備前岡山へ移封となったことに従い、伊木家３代当主忠貞（1612-72）が寛永16（1639）年、虫明に陣屋を構えました。

虫明に設けられた陣屋は、海岸の警備基地としての意味をもっており、虫明は陣屋を中心とした小さな城下町のようでした。その後、明治初年まで240年間にわたり、虫明の地に伊木家の陣屋は存続することになりました。

【虫明焼の記録】

虫明焼のもっとも古い記録は、伊木家の所蔵品を記録した「蔵帳」の「飜（建水）ノ部」にみられる「文政二年卯九月虫明新焼」という記述です。この記録から、文政元年（1818）ごろには生産が始まっていたと推測されますが、はっきりとした開始時期は不明です。

虫明焼の窯は、大星（瀬戸）窯、池奥窯、立場（間口）窯の三か所が知られています。虫明焼の窯では、主に日常に必要とされる器を生産していたようです。虫明焼には、茶碗、水指、花入等の茶道具、徳利、鉢、皿等の日用品も含まれます。

古虫明鉄釉鉢

錆絵雪竹文手鉢
東京国立博物館
出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

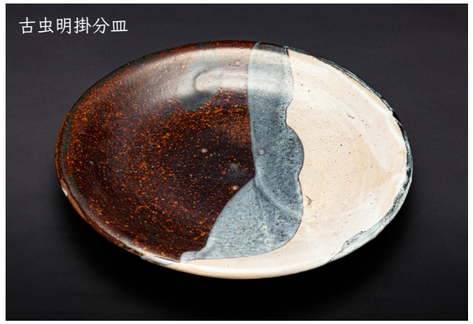
瓢形茶入
東京国立博物館
出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

古虫明白帆掛絵土瓶

古虫明手焙り

古虫明燭台

古虫明菊絵燭台


古虫明掛分皿

古虫明掛分竹絵五合徳利

古虫明掛分四方徳利

【備前焼との差別化】

天保13年（1842）、虫明で備前焼に似た焼物を焼いていることを迷惑として備前焼の陶工が連名で岡山藩に訴える事件が起こります。その結果、責任者は処分され、虫明焼の窯は一旦廃窯になりました。周辺で備前焼とよく似た徳利が採集されていることから、この事件の舞台となったのは池奥窯であると言われています。産地が隣接する備前焼との差別化を必要としたことが、虫明焼のかたちに影響を及ぼしました。

水盤

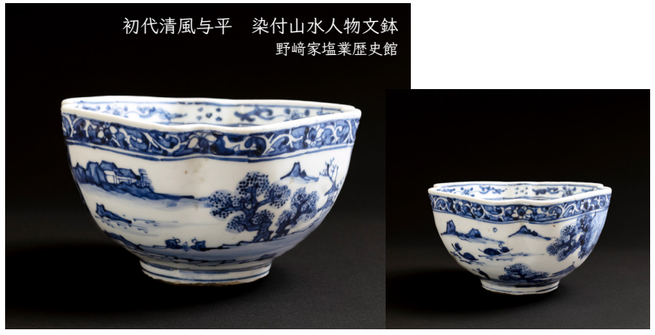
裏に「天保十二年辛丑九月雲口」と刻銘されている。天保12（1841）年は、虫明焼廃窯の前年にあたる。

初代清風与平　色絵菊文鉢

【伊木三猿斎と清風与平…虫明焼の基礎と有力者の好み】

伊木家14代当主 伊木忠澄（1818-86）は、幕末期に政治の世界で活躍した一方、茶人としても知られ、三猿斎と名乗りました。三猿斎は岡山藩筆頭家老として江戸と京都を度々訪れ、その際に茶道具を買い求めましたが、蒐集するだけでなく、茶碗などを手造りしたり、京都から陶工を招いて自分好みの茶道具を作らせました。弘化４年（1847）、立場（間口）窯で茶道具を制作するために、三猿斎は京都の陶工、初代清風与平（1801-61）を招き、これにより虫明焼が再開されます。

三猿斎は当時の京都で流行していた焼物にあこがれ、同じものを地元で制作するために与平を呼び寄せました。虫明焼は、京焼の影響と伊木三猿斎の好みが反映された独自の雰囲気をもつ焼物としてかたちづくられたのです。


初代清風与平　染付山水人物文鉢
野崎家塩業歴史館

初代清風与平　染付煎茶図水指
野崎家塩業歴史館

中国風の服装をした人々が煎茶を楽しむ姿が描かれている。

「於虫明清風造」の染付銘がある。

三島写角水指
個人蔵

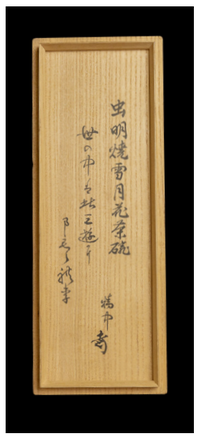
写真提供：岡山県立博物館

少庵が所持した高麗三島を写したものといわれる。現代に伝わるものは玄々斎が書付をした箱と、玄々斎が花押を朱漆で記した塗蓋をともなっており、三猿斎と玄々斎の交流が偲ばれる。

錆絵雪月花文茶碗
野崎家塩業歴史館

伊木三猿斎（忠澄）
岡山大学附属図書館

箱の蓋裏には「世の中は此三遊にまもられたり」と玄々斎が墨書している。



【伊木三猿斎と裏千家玄々斎の交流】

茶の湯を好んだ三猿斎は、文久元（1861）年に裏千家11代家元玄々斎（1810-77）に入門します。文久3(1863）年、玄々斎は千少庵の250回遠忌を催します。その際に三猿斎は虫明焼の三島写角水指を30個つくり、玄々斎に贈りました。これを機に、角水指に使った緑色がかった発色の釉薬「ナミグスリ」（土灰釉）が、虫明焼の特徴として世に知られるようになりました。

優れた茶道具としての評価を高め、後に「日本一清楚」と評される虫明焼の基礎は、三猿斎と玄々斎の交流によって築かれました。

雪

月

花

眞葛香山　一文字牛文茶碗
個人蔵

福寿字文引舟水指
個人蔵

【眞葛香山…陶工がもたらした技術の伝播】

眞葛（宮川）香山（1842-1916）は京都に生まれ、国内外で高い評価をうけた陶工です。明治元（1868）年、香山は三猿斎の招きで立場（間口）窯に来窯します。京焼の文様や形を取り入れながらも先人の模倣にとどまらず、「ナミグスリ」など虫明の原料を活かし、後に帝室技芸員になる卓越した技術によって独自の作風を築きました。滞在期間は2年ほどでしたが、香山は虫明焼に新風をもたらしました。

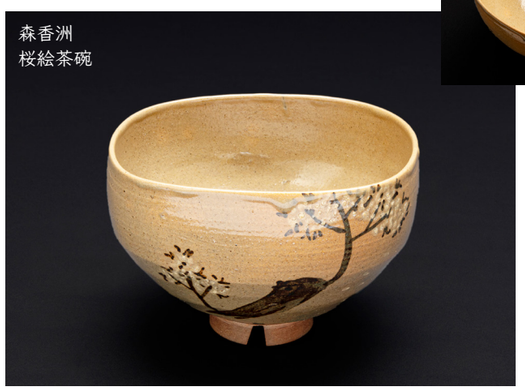
文久3（1863）年以後、虫明焼の窯の経営の主体は、伊木家から民間へと移ります。幕末から明治の陶工の活動が京都から地方へ技術の伝播をもたらし、地方の殖産興業政策とも関連して地方の窯業の隆盛をもたらしました。

眞葛香山　落雁水指
個人蔵

【森香洲】

香山が岡山を去った後、虫明焼を継承したのが森香洲（1854-1921）です。

虫明の郷士、森角太郎が伊木氏から立場窯を譲り受けたことから、角太郎の長男である彦一郎は窯業に就きます。彦一郎は眞葛香山に師事し、「香」の一字をもらって香洲と名のります。



森香洲
桜絵茶碗

森香洲
落雁水指

【虫明陶器製造所】

森香洲は明治 28（1895）年、虫明に「虫明陶器製造所」を創設し、所長として作陶にあたりました。当時の職人の数や経営の詳細は不明ですが、「当座売揚簿」から当時の様子をうかがうことができます。

当座売揚簿によると、製作した品目は一輪生、香炉、花筒、火入、茶壷、茶呑、梅鉢など茶道具類と思われるものから、片口、丸鉢、火鉢、汁椀、徳利、志便などにおよびます。

虫明陶器製造所では、茶道具だけでなく日常の道具を含む幅広い製品をつくり、販売していました。それらを地元及び岡山市の陶商が低価格で購入していたことがわかります。

明治期に、経営不振により途絶えた虫明焼を、香洲らが再三復興させようとしましたが長くは続きません。経営に行き詰まると、香洲はたびたび香山を頼り横浜に出向いています。

森香洲
色絵菊の絵湯呑

当座売揚簿
個人蔵

山根四山（やまねしざん）
びわ鉢

川崎玉峯（かわさきぎょくほう）
灰釉茶碗

【岡本英山】

岡本英山（おかもとえいざん）（1881-1962）は、英田郡江見村（現 美作市）の出身で、全国の窯場を渡り歩いた陶工です。

昭和 7（1932）年 4 月、当時廃窯していた虫明焼の復興を熱望され、虫明に来窯しました。立場に窯を築き、戦後まで約 30 年間にわたり虫明焼を支えました。作品の多くは茶陶で、特に茶碗、水指等の茶陶に優れた作品があります。薄作りの繊細で優美な伝統を受け継ぎつつ、多彩な作品をのこしました。

岡本英山
一合徳利

岡本英山
手桶水指

岡本英山
椿絵茶碗

横山香宝
落雁菓子器

【黒井一楽・千左…現代につづく虫明焼】

横山香宝に師事した黒井一楽（いちらく）（1914-1996）は、昭和 8（1933）年より作陶をはじめ、昭和 55（1980）年岡山県重要無形文化財保持者に認定されます。一楽の子、黒井千左（せんさ）（1945-）は京都市工芸指導所を卒業後、父について作陶を学びました。県展や日本伝統工芸展などで活躍し、平成 21（2009）年瀬戸内市重要無形文化財保持者に、平成 23（2011）年岡山県重要無形文化財保持者に認定されます。

黒井千左とその子、黒井博史（ひろし）（1974-）は、釉薬や陶土など虫明焼ならではの素材と技法を研究し、伝統を踏まえつつも、象嵌（ぞうがん）や線文など新しい造形や感覚を取り入れた、現代の虫明焼の作品づくりを行っています。

黒井千左
鉄釉象嵌梅文茶盌

黒井千左
雪中竹文茶盌

黒井千左
窯変線彫青点文壺

黒井博史
窯変流し釉茶盌

黒井博史
柿灰釉掛分花入

【横山香宝】

眞葛香山に師事したのち、森香洲の弟子となったのが初代横山香宝（よこやまこうほう）です。その弟であり香洲の弟子であった二代香宝（1869-1939）は、昭和 5（1930）年に虫明の瀬溝に窯を築きます。

横山香宝
ボウフラ

黒井一楽
雪中竹うぐいす文茶盌

黒井一楽
茶盌

虫明焼年表

江戸	1819	文政 2	伊木家の所蔵品を記録した「蔵帳」の「飜（建水）ノ部」に「文政二年卯九月虫明新焼」と記載がある。
	1842	天保 13	虫明で備前焼に似た焼物を焼いていることに対して、備前の陶工が抗議を行う。池奥窯廃窯か。
	1847	弘化 4	伊木三猿斎が初代清風与平を虫明に招く。立場窯開窯。
	1863	文久 3	玄々斎は千少庵の 250 回遠忌を催す。その際に三猿斎は虫明焼の三島写角水指を 30 個つくり、玄々斎に贈る。
			森葛雄（角太郎）が窯の経営を引き継ぐ。
明治	1868	明治元	三猿斎が眞葛香山を虫明に招く。森葛雄と森香洲（葛雄の子、彦一郎）が香山に師事する。
	1870	明治 3	香山が帰京する。香山はその後、横浜に移る。
	1880	明治 13	森香洲が横浜の香山をたずねる。立場窯中断か。
	1882	明治 15	森香洲が虫明にもどり、黒井覚弁の支援を得て窯を経営する。
	1886	明治 19	森香洲は窯を覚弁に提供。覚弁は香洲に相談の上、窯を旧藩士篠尾敏樹に売却。香洲が横浜の香山をたずねる。三猿斎没。
	1895	明治 28	森香洲は篠尾敏樹から窯を借り入れ、「虫明陶器製造所」を創設する。振興するが 6 年ほどで廃窯。
	1905	明治 38	森香洲が窯を再興するが 7 年ほどで廃窯。
大正	1913	大正 2	森香洲が香山をたずねる。
	1918	大正 7	虫明焼と伊部焼をつくる備前焼株式会社創立。森香洲が職長になるが1年余りで退く。
昭和	1930	昭和 5	森香洲の弟子、横山香宝が虫明の瀬溝に窯を築く。
	1932	昭和 7	岡本英山が虫明に来窯し、立場に窯を築く。
	1933	昭和 8	横山香宝に師事し、黒井一楽が作陶を始める。
	1980	昭和 55	黒井一楽が岡山県重要無形文化財保持者に認定される。
平成	2009	平成 21	黒井一楽の子、黒井千左が瀬戸内市重要無形文化財保持者に認定される。
	2011	平成 23	黒井千左が岡山県重要無形文化財保持者に認定される。

※参考文献をもとに作成

虫明焼窯跡

主要参考文献

- 桂又三郎1966『備前虫明焼』木耳社
- 桂又三郎1976『茶人伊木三猿斎』奥山書店
- 池上千代鶴1988『虫明焼の記録』富士印刷株式会社
- 邑久町虫明焼作陶会1993『古虫明と現代虫明焼展』
- 邑久町史編纂委員会編2002『邑久町史 文化財編』邑久町
- 邑久町史編纂委員会編2007『邑久町史 史料編（下）』瀬戸内市
- 邑久町史編纂委員会編2009『邑久町史 通史編』瀬戸内市
- 福冨幸・大山真季編2016『世界を魅了した陶芸家 宮川香山 ―没後100年 虫明焼と明治の陶芸―』岡山県立美術館
- 茶道資料館・岡山県立博物館編2018『むしあげ 岡山に花開いた京の焼物』

作品画像

表紙：銹絵雪月花文茶碗　野崎家塩業歴史館
裏面：福寿字文引舟水指　個人蔵
※その他、写真中に所蔵先表記のないものは瀬戸内市所蔵

協力：黒井千左、重根弘和、岡山県立博物館、野崎家塩業歴史館、株式会社三沢美術、瀬戸内市中央公民館、瀬戸内市立美術館
（敬称略）

撮影：相澤心也写眞事務所

発行：2024 年 3 月

seto-reki.or.jp

公益財団法人　瀬戸内市歴史まちづくり財団
岡山県瀬戸内市牛窓町長浜 5092
TEL 0869-24-7788
FAX 0869-24-7008